

意識の発生と終焉が人間の始まりと終わり

人体の死と人間の死を区別しよう。私たちは、散髪する・爪を切る・足を切断する。人体の一部の死である。同じく、採血すれば赤血球は死に、摘出すれば腎臓は死ぬ。だが人間は死んではいない。心臓もなくし肺も腹も手足もなくしたとしても、意識があれば人間は死んではいない。人間の死は意識の死である。逆に、体は形状を保ちその細胞は生きているとしよう。だがもし意識が失われていれば、人体は生きていても人間は死んでいる。カメラ、レコーダー、運動器具を備えた装置を宇宙空間で作動させれば色や形や音に反応し動作をするが、意識がなければただの精緻な機械であって人間ではない。意識の終焉をもって人間の死とする。

さかのぼって、ひとの始まりを考える。妊娠子宮の中で、物質現象として髪や爪が伸び臓器が形成されてくれば人体の始まりである。だが人間の始まりではない。人間の始まりは、内外界の刺激に対して、妊娠子宮の中の人体が単なる物質反応としてでなく意識反応として反応を始めたときである。ここで意識反応とは何をさすかを言わねばならない。人体が刺激にさらされたとき、同じ範疇の刺激の中から、ある特定の刺激を他と区別して選び出して反応することをいう。その能力を獲得したとき人間となる。人間は意識を持った人体の形状をした生物である。生物現象としては意識が、文化現象としては人格が、始まる前はまだ人間ではなく、終わったあとはもう人間ではない。

受精卵はまだ人体ですらないが、人体となり、ひきつづいて意識の獲得へ至る自律的な過程の出発を開始した。意識が、この生物としての最高到達点である。一方、意識の喪失は、生物としてすでに成し遂げた到達点を過ぎたあとに起こる。ともに人間ではないにせよ、両者は区別されなければならない。無脳人体は意識への道程を有さなかった。脳死体は意識を終焉した人体である。

(改：NHKフォーラム 生命倫理 1998.05)